

未明否定論争と近代児童文学観

横山信幸

未明否定論争は、児童文学観の確立をも含めて、日本の児童文学界にとってなお今日の問題でもあるのである。

本稿では、まず、古田足日・鳥越信・いぬいとみこ氏らによる未明童話批判にどのような特色が見られるかといったことについて述べ、次に、近代児童文学とは何か、という問題についてわたくしの考えを述べてみたい。

二

古田・鳥越・いぬい氏らが、未明童話の特徴として挙げているのは次の点である。

- 1、人物の性格が明瞭でなく、人間と人間、人間と環境との葛藤もほとんどない。^{注3}
 - 2、未明の童話には、運命に対する抵抗心が見られない。^{注3}
 - 3、未明童話の中心にあるものは「気分」である。^{注4}
 - 4、未明の童話の世界は暗く、テーマはネガティブである。^{注5}
- 右のような指摘は、彼ら児童文学者からだけではなく、一般文学の側からもなされる。例えば、杉浦明平氏は次のように言う。

……どこからも明りがさしてこず、終始暗い色一いろでぬらされているため、物陰でうごめく人物たちには性格も特徴もほとんど見わけられないことになる。(P.2)

……未明の童話には、人間どうしの葛藤がほとんどまったく欠けているので、やっとなつかまえた幻想のかけらも生長のしようがなく、貧弱なままに終わるをえない。(P.9)

……誕生と同時にかれは人生に迫害されるものと宿命づけられているのだから、抵抗心などおこしようがないではないか。(P.8) (「小川未明論」『文学』1961・10)

未明童話に対する1から4のような指摘は、別に特殊なものではなく、誰でも

一九五三年、「少年文学の旗の下に」と題された一文が早大童話会によって発表された。この宣言文以降、六〇年の初めにかけて一連の未明否定論が若手の児童文学者によって書かれる。これらの論は、未明童話の批判を通して新しい児童文学観をうちたてようとする試みであった。当時の雰囲気をも西本鶏介氏は、「未明否定者にあらずれば児童文学者にあらずるといった風潮が、ぼくたちのまわりにはうずまいていました」と言う。それから二〇年、児童文学界における未明評価はどうなっているのだろうか。統橋達雄氏は近著『未明童話の研究』(昭和52年明治書院)の中で次のように述べている。

どのような批判があろうと、小川未明の童話は、日本の近代児童文学史にそびえたつ巨峰のひとつである、とわたしは考えている。未明童話を無視した日本児童文学史は想像することができない。それだけに、未明童話の本格的な研究が待たれる。(P.300)

また、西本鶏介氏は次のように言う。

未明否定によって日本の児童文学はどれほどの進歩をなしたか。未明は本当に克服され、否定されたか。(略)早急な判断はつしまなければなりません。結論からいえば未明は、否定も克服もされていないというのがぼくの考えです。(「伝統は克服されたか」『日本児童文学』1974・1 P.57)

一九五〇年代半ばの華々しい批判にもかかわらず未明の位置は揺らいではいない。この論争をふり返り、猪熊葉子氏は次のように述べている。

……いかに生きるべきかを子どもたちに考えさせ、かつその道をさし示しているような作品のみが、児童文学のあるべき姿であるとする、日本の児童文学界に根づよく存在する実践求道的な発想法を改めないかぎり、未明童話の文学的価値は決して発見されえないことを書きそえておきたい。(「小川未明」『日本の児童文学作家1』昭和48年 明治書院 P.116)

首肯しうる妥当なものだったと言えるだろう。だが問題はこの先にある。彼らはこれらの特徴を指摘するや否や、そこから直線的に未明童話批判―未明否定へと突き進んでしまったのである。

三

鳥越氏は次のように言う。

未明童話のテーマはすべてネガチブなもの——人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびる等々——であり、その内包するエネルギーがアクチブな方向へ転化していかない点で児童文学として失格であること、従って読み物としての面白さも全然なく、加えて誹澁な文章に大きな抵抗を感じたことである。

(「未明童話の評価のために」『東京新聞』昭和36年6月1日)

未明童話のテーマには確かにネガティブなものが多い。だがその「暗さ」こそ彼の作品が多くの人を引き付けた要因なのである。鳥越氏は「内包するエネルギーがアクチブな方向へ転化していかない」という一言でもって未明童話を否定してしまった。ここで問われねばならなかったのは、「内包するエネルギーがアクチブな方向へ転化していかない」ということと、それが「児童文学として失格である」ということとはいかなる論理で結ばれるのかということである。この二つを結ぶためには、少なくとも、未明の文学とは何であるのか、近代児童文学とは何かという二つの大問題に正面から答えることが必要になってくるはずである。だが鳥越氏は未明童話の現象面と、児童文学は健全であらねばならないとする良識とを、直ちに結びつけてしまっている。

『子どもと文学』グループはどうであったか。いぬいとみこ氏は「赤いろうそくと人魚」の特徴として次の点を挙げている。

……舞台装置になっている「ものすごい」ふんい気だけはわかりますが、そこに登場してきた人魚については、あまりはっきりとその姿を思いうかべることができませぬ。(P516)

どんなに幻想的な話であっても(略)しっかりと骨ぐみが必要と思われるのに、ここには、非現実の世界をリアリティをもって読者にうつたえるような、設定がありません。(P6)

……つぎに私たちがふしぎに思ったのは、ここに出てくるおじいさんやおばあさんが(略)不安定な人間につくられていることでした。(P8)

……ファンタジーの世界——一つの均勢のとれた築きあげられた幻想の世

界——を築きしもうと、期待して読んでいった私たちの求めるものとは違かったのでした。(P9) (『子どもと文学』1967・5 福音館書店)

『子どもと文学』グループが求めていたのは、テーマ・筋・登場人物の性格等が、はっきりとわかりやすく「目に与る」形で表わされた児童文学作品だと言える。このグループの「真」である渡辺茂夫氏は、昔話には子どもの文学としてたいせつな「基本的な要素」が含まれていると述べ、さらに次のように言う。

この(昔話のこと引用者)エッセンスとは、目に見える具体的、しかも客観的な出来事であって、個人的な感情とか情緒すなわち主観的なもの抽象的なものではないのです。(『子どもと文学』P118)

こういう児童文学観からすれば、「さびしい、暗い気分だけが、くり返し述べられているだけ」の未明童話は、当然批判の対象になるだろう。未明童話の特徴を指摘した後、いぬい氏は次のように言う。

——ふしぎな話だ。

——これが日本の児童文学の近代的達成の一つだとは……

——作者は子どもにむかって書いているのだろうか？

——大人のための「童話」^{註9}としてみても、なおさら不十分だ。(『同前』P10)

だがこれは、自分たちの描く児童文学観からする未明童話の裁断に他ならぬ。大藤幹夫氏は、「未明にとって必要だったのは、人魚そのものではなく人魚をとりにまく雰囲気(『世界』)ではなかったのか」と述べている。だとすれば、『子どもと文学』グループの未明批判は、未明の表現しようとしたものとぶつかった所から生まれたものではなく、それゆえ「次元のちがう」すれ違いとして終わるしかない。

いぬい、鳥越氏らの未明否定論は、新しい児童文学運動を興すことには成功したが、それは、未明童話と正面から対決した所に興った運動とは言い難い。

さて、児童観についてはどうであろうか。未明童話を否定し、昔話の中に児童文学の基本的要素をみようとしたり『子どもと文学』グループの児童観について見てもよい。彼らが否定した未明には、少なくとも次のような児童観があった。

弱い者は、常に強い者に苛められて来た。婦人がさうであり、子供がさうであり、無産者がさうであった。(略)しかし、時勢は、推移した。今や婦人は平等の権利を主張し、無産階級の解放は、また決定的の事実と見らるるに至った。もはや彼等は、手の下の罪人のやうな待遇を受けずに済むことも恐

らくは遠くはあるまい。(略)ちやうど、資本家が、労働者を酷使したやうに、男子が女子を束縛したやうに、子供は常に、その親達から、また大人から虐待されて来たのだ。そして、無産者や、婦人は、いつしか、自分達の境遇から奮起して、横暴な権力の下から脱して、解放を期することが出来ても、ひとり、子供は、いつまでも、手の下の罪人であるなければならないのだ。(略)私は、思ふ。多くの子供は、親達に対して、大人に対して、対抗し得ないところから、言ひ換へれば絶対に弱いがために、曾て、命令に服従せずにはゐられなかつた。どんなことでも、言ひ付けられるばしなればならぬ。それが多くの子供の運命であつた。そして誰も、曾て、子供等のためにこの暴虐な運命に対して抗訴するものがなかつた。絶対に服従しなければならぬ。それが、子供としては、あたりまへであると思はれて来た。そして今日、なほ子供の運命に対して怪しむ者をみないのである。永久に、子供は、手の下の罪人であるなければならぬだらうか？(略)孤児院からと称して、まだ、年もいかなない子供を、軒毎に立たせて、物を売らせるのや、まだ四つか、五つの子供を地面に坐らせて、通る人々に頭を下げさせて、錢を乞はしめるなどを、私は、見る時に、血が逆上する。その者の罪は、まさに死に値すると感ずるのである。(略)この故に、私は、子供等の代弁者となり、ために抗議し、主張し、またその世界の一切を語らなければならぬ芸術の必要を感ずる。同時に、一方この時代の少年を慰撫する芸術をも必要なりとするのである。(「子供は虐待に黙従す」『小川未明作品集第五巻』昭和30年1月 講談社 P 310-313)

未明は、子供をこの社会の一番の弱者と見、そういう社会に対して深い怒りを感じている。では、いぬい氏たちの考える子供とは何か。『子どもと文学』グループはどのような子供を発見したか。彼らは繰り返し次のようなことばを使っている。「生きた子ども」「子どもらしい感受性」「外界を知ろうとする飽くことを知らないエネルギー」「人生経験の浅い子どもたち」等々。これはほとんど無内容な語の繰り返しである。ここからは統一された児童像は浮かんでこない。そういう子どもたちの「理解力を考えてみたり、子どもをおもしろがらせたりすること」^{注13}、これが彼らの考える児童文学観であった。こういう児童観と児童文学観は、「子供は虐待に黙従す」に見られた未明の確固としたそれに比べれば、まことに漠然としたものだったと言つていいであらう。鳥越氏及び『子どもと文学』グループの未明否定論は、児童文学の創作技術について詳細に触れはしたが、未

明に対抗しこれを克服し得るだけの新しい児童観をうちだしているとはいひがたい。古田氏は言う。

つまり鳥越は未明を否定したのではなく、除外し、結果として敬遠してしまつたことになりませう。(略)もつとも根本的なものは、未明と対決する姿勢がなかつたことです。(「内にある伝統とのたたかひを」『児童文学の思想』1973年 牧書店 P 21-22)

『子どもと文学』及び鳥越信の「未明批判」¹⁴というくり方方をばくはしますけれども、それとぼくとでは違つていふ気がしてならない。つまり一口に申しますと『子どもと文学』及び鳥越君は外側から未明を批判した。(「討論小川未明をめぐって」『前出』P 17-18)

ではかく言う古田氏はどうだったのか。事実、古田氏の「さよなら未明」は単なる未明否定論に終つてはいない。氏は未明童話の持つエネルギーに着目し、これを変革に役だつものに転換しようとしている。

この詩(未明の「海の太陽」—引用者)には原始的なエネルギーが満ちている。(略)原始心性のうちにこめられているエネルギーに目を向けよう。

(「さよなら未明」『現代児童文学論』1980年 くらしお出版 P 32)

童話を書くことは自分と子どもに呪文をかけることであつた。呪文は実は変革のための技術である。しかし、呪文では変革は行なえない。変革にやくだつものはエネルギーであり行動である。(「同右」P 30)

こういう古田氏の未明論は、鳥越氏や『子どもと文学』グループにみられたような未明童話への一方的裁断に終つてはいない。では古田氏は「原始心性そのものを対象化」^{注15}これを克服することに成功しただらうか。

小野和子氏は「一本の根なし草・古田足日『さよなら未明』批判」(『教育園語』49 1977・6)で次のように述べている。

未明を「資質の人」としてとらえることから出発した古田は、その資質の中心を説明するために「原始心性」ということばをもちいた。「原始心性」ということばは、悟性が立入ることを許さない(あるいは潔しとしない)世界を暗示する点において、やはり「資質」ということばによく似ている。(P 42)

……一歩つっこんでこのことばの意味するところを具体的に探ろうとすると、実は何もかも明らかでない。(P 43)

古田自身によつて、一度も吟味されたことのない「原始心性」という主張

は、ことばの「魔術」というものでしかない。(P 47)

未明のもっていたものを「原始心性」というような得体の知れない概念に下っておきかえることはできない。そこには、未明が生きた日本近代に対する、まことに未明的な個性の闘いがあるのだ。(P 50)

「原始心性」ということばを切り札に、未明を内部からとらえ克服しようとした古田氏の試みは、小野氏によって「ことばの魔術」「得体の知れない概念」として退けられている。

古田氏もまた、「伝統」を現代によみがえらせることはできなかったようである。

四

一九五〇年代半ばから六〇年にかけて展開された古田、鳥越、いぬい氏らの未明批判は、今日どのように評価されているか。『子どもと文学』について、猪熊葉子氏は次のように述べている。

(アンデルセンの「人魚姫」は引用者)すべてキリスト教的愛の実践という目的に合致するようにつくられているからである。

しかし、「赤い蠟燭と人魚」の世界は、正体不明の闇の力を認識するためにつくられた。したがって、『子どもと文学』の未明論は、もともとその構造原理を異にする世界に適用されるべき評価の規準で未明の作品を評価してしまつたことになる。そこに否定的な評価が生じたのは当然のことであつた。(「小川未明」『前出』P 94)

鳥越氏については、関英雄氏が次のように述べている。

(鳥越信のように引用者)未明童話のネガチブな側面のみをおさえて、そこに一切の評価を置くというのは、それが児童文学の本質論に立つたものであるといつても、大河原浩時代の政治的批判に近いとの疑いを抱かせる。

(「未明童話をどう見るか」『新編児童文学論』1988・7 新評論 P 199)

大藤幹夫氏は次のように言う。

明るさ暗さの問題においてみるだけでなく、未明のもつ人美意識Vの点からとらえなおす必要があるのではなからうか。それは児童文学以前の文学としての検討であろう。(「小川未明批判の方向の再検討」『日本児童文学』1974・1 P 44)

これらの未明批判に対する「反批判」に共通するものは、もっと未明の世界そ

のものに即して未明童話をとらえよ、と言っている点であろう。古田氏の、「ぼくを単純な未明否定論者と思っている人は、もう一度『さよなら未明』をお読み下さい」という弁明にもかかわらず、古田氏も含めて、五〇年代半ばの論争では、未明童話の本質的な部分は明らかに得なかつたというのが、今日のおおかたの意見である。

五

さて、五〇年代半ばから六〇年にかけての一連の未明否定論とは何だったのか。未明否定論が、後の日本児童文学に及ぼした影響について、鳥越氏は次のように述べている。

たしかに子どもへのアプローチという点では一歩も二歩も前進したが、やや古風にいえば、作家魂とでもいうべきものは喪失して、単なる消費文化財になつてしまった。そしてこの場合、先の「子どもと文学」が執筆者たちの意図とは別に、このような傾向に拍車をかける理論的な根拠となつてしまつた。(『日本児童文学案内』1983年 理論社 P 189)

古田氏は次のように言う。

「子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすく」という『子どもと文学』の主張は、日本の児童文学のさまざまな欠点と同時に、文学性もタライの水ごとすててしまひそうな方向を持っています。(「内にある伝統とのたかいを」『前出』P 24)

「子どもへのアプローチ」がいくら進んでも、作品から文学性が失なわれてしまえば、児童文学はもはや文学とは呼べなくなつてしまふであろう。鳥越氏も古田氏もこうなつた原因を『子どもと文学』のせいにしてゐる。だがこのような事態に立ち至つたのは、すでに見てきたように鳥越、古田両氏をも含めて、未明否定論者が未明童話の本質を未明文学の内部から明らかにし得なかつたことによる。さらに言えば、未明が「子供は虐待に黙従す」でみせたほどの強い児童観を、戦後の日本の児童文学者はうちたてることがなかつた。「少年文学の旗の下」に次のような部分がある。

従つて我々の進むべき道も、真に日本の近代革命をめざす変革の論理に立つ以外にはなく、その論理に裏付けられた創作方法が、少年小説を主流としたものでなくてはならぬことも、また自明の理である。

また、児童と文学との関係を鳥越氏は次のように言う。

児童文学もまた、それが児童文学と呼びうるかどうかは、その作品が子ども

のために書かれたかどうか、読者として子どもが存在しているかどうか、という点にあるのではなく、その作品が多くの子どもたちに読まれ、作品と子どもたちとの間に、インタレストが交流したかどうかがきめ手である。

（「児童文学とは何か」『新編児童文学への招待』1976年 風潮社 P 48
～49 傍点―引用者）

これでは、児童文学はこれを与える側の論理によって覆われるか、反対に現象としての子どもたちにとっても迎合してゆくしかない。

文学性を喪失した未明批判後の児童文学作品について、ついに次のような批判がでてきた。これもまた当然のことであろう。

児童文学を真の近代文学の位置に高めるとしながら、テーマそのものまで子供向きでなければならぬとする考え方は、むしろおのれの内面に対して忠実な未明文学の方がよほど説得力があります。（「伝統は克服されたか」西本鶏介『前出』 P 58）

万屋秀雄氏は次のように言う。

文学で、これ程までに読者のことを考えるのは、やはり行き過ぎではないか。もはや文学ではなく、児童学になってしまうのではないかと考えるのだ。（「古田足日論」『現代児童文学の可能性』昭和50年 大阪教育図書 P 186）

若手児童文学者らによって展開された未明童話批判は、当時の児童文学界に新鮮な衝撃を与えた。この時、児童文学とは何なのか、ということについての原理的考察が、未明童話という具体に即して始められるべきであった。そういう貴重な機会が与えられたのである。だが児童文学界はこれを見送った。そういう貴重な鳥越氏のことばに見られるような、児童文学作品の「消費文化財」化である。こういうことになった原因は、先に指摘したような、いぬい、鳥越氏らの論の欠陥にもあるが、もう一つ指摘されるのは戦後の児童文学界の力量不足である。万屋氏は言う。

（児童文学停滞の原因の根本は―引用者）児童文学作家の作家的資質・力量の平均化・停滞にあることはあきらかである。

戦後の児童文学者たちは、あまりにも児童文学だけの世界にへばりつきすぎていたのだ。（「古田足日論」『前出』 P 178～179 傍点―万屋）

一九五〇年代半ばの未明否定論争は、未明亜流の「童心主義的」児童文学を打ち砕く役目は果たしたが、それは戦後の日本児童文学の歩みにとって、諸刃の剣だ

ったのである。

六

近代児童文学とは何であるのか。これについて、わたくしの考えを述べてゆきたい。『子どもと文学』は言う。

日本の近代童話の開拓期にあたって、わが国の代表的な作家たちは、なんというさかだちの努力を演じなければならなかったのでしょうか。

この人びとは、「子どもの文学」からたいせつな子どもを追い出すことに一所懸命努めたのでした。（略）わが国の子どもの文学からすてられたのは、しかし、子どもばかりではありませんでした。

低俗なおとぎ話が、げびたおもしろさのみちているというので、人びとは子どもの文学からおもしろさを追い出してしまいました。（P 24～25）

未明は本当に「さかだちの努力」をしていたのだろうか。自分の童話から「子ども」と「おもしろさ」を追い出そうとしたのだろうか。「赤いろうそくと人魚」について、猪熊葉子氏は次のように述べている。

この作品の与える感動は確かに明るいものとはいえない。なぜならあの「非人称のあるもの」のふるう運命的なおそろしい力を、未明はこの物語のなかに表現しているのであり、そのことから暗さが生まれているのである。

ここに未明が描いてみせたのは、まさにカイザーのいうところの「その世界を見るものに合理的解釈をも感情的説明をも許さない、陰暗なものや矛盾したもの独自の世界」であったのだ。その意味でいうなら、この作品はもともと、空想世界独自の論理の一貫性もちえなかつたのであり、逆にそのためこそ、運命の不条理さを表現しえているのである。そこにこの物語が与える暗い感動、あるいは戦慄が生まれるのだ。（「小川未明」『前出』 P 93）

未明否定論が否定の根拠にしたところの作品の「暗さ」「ネガティブなテーマ」は、ここでは「運命の不条理さ」の表現として逆に評価されている。いぬい氏の指摘した「さびしい暗い気分」「道ゆきの不自然さ」こそ未明童話のねらった世界であった。確かにこの作品には人魚の性格は明確には書かれていない。しかし北海の「うねうねと動」く「ものすごい波」は、十分に描かれているのである。

未明が描きたかったのは、「人魚姫」についての明るいお話などではなく、閉ざされた境遇の中で不遇のまま終るしかない人間の運命と、そうあるしかない世界に対する呪詛の声であった。それは日本の近代に身を晒さなければならなかつた

未明の内心の呻きである。

山田稔氏は言う。

故郷喪失の漠とした孤立感、資本主義化しつつある都会での生の不安と恐怖のあらわれであった。そこに未明の自己疎外意識を発見しようのだが、彼の場合、疎外をすべく意識すればするほどしきりに疎外からの脱出が主観的・情緒的に求められ、ついには生の欲求自体が絶対化されるにいたるのである。(「小川未明における思想と美学」『文学』1961・10 P 33) だが未明は「強烈な生欲」にもかかわらず一方では、生のために争いたたかうことを嫌悪し、おそれた。(略)

この「臆病さ」が弱者への同情を生みだす。(略) 疎外され、自らを人間として畸型化されているという意識がグロテスクなものへの異常な関心を生み、そこに抑圧されゆがめられた自己の生の姿を発見する。この意識、あるいはそこからあみだされる美学は実存主義的である。

しかしこの「臆病さ」は同病相憐れんでの泣きごとに終るのではなく、失意のうちに宿る怨念と窮鼠の反逆とをこめての、人生観・芸術観の積極的な主張となってあらわれるのだ。(『同前』P 33)

未明の作品に流れる暗さ、絶望感、孤立感、大正中期から昭和初期にかけて日本の近代がかかえ込まざるを得なかった社会矛盾の文学的形象化だと、山田稔氏は言う。言い換えれば、未明童話にこそ日本の「近代」は表現されていたのである。

「子供は虐待に黙従す」に述べられているごとく、日本の近代化の矛盾は労働者階級のみならず、社会的に最も弱者であるところの子どもの上にこそ集中的に現われてきた。自らの不遇を訴えるすべも持たず、いつまでも「手の下の罪人」である他ない子どもにとって世界はどのように見えただろうか。未明が「赤いろうそくと人魚」で描いて見せた世界こそ子どもの目に映った世界だと言っているだろう。己れの陥った境遇を人日本資本主義の興隆によってもたらされたところの社会矛盾として論理的にとらえる術をもたぬ子どもにとって、困りの世界は不分明なもの、不合理なもの、不透明なもの、不条理なものとして見えたに違いない。人魚の母娘のみせた嘆きと人間世界への呪いこそ、不遇な境遇の中で生きるしかない子どもたちの心の深奥に流れる声であった。未明童話がとらえた「その世界を見るものに合理的解釈をも感情的説明をも許さない、陰暗なものや矛盾したものの独自の世界」とは、また、近代日本の児童たちがおかれた世界で

もあつたはずである。未明童話にこそ子どもは抱えこまれていた。未明は「日本の近代童話の開拓期にあたって」決して「さかだちの努力を演じ」たのではなかったのである。

さて、近代児童文学とは何か。『子どもと文学』は望ましい児童文学作品として、「具体性、行動性、リズム、スリル、素材の親近性、明るさ、ユーモアなどの要素の強い」ものを挙げた。それ故「個人的な感情とか情緒」^{注16}、「作者の人生観なり哲学なり感情なりを、微に入り細にわたって述べ」た作品は、好ましくないとしたのである。これらの特徴は確かに彼らの学ぼうとする昔話と共通する点を持つている。だが昔話から学ぶだけでは近代児童文学は成立しないだろう。近代と呼ばれるためには児童文学はどのような変質を遂げねばならなかったか。

伊藤整は近代小説の成立について次のように述べている。

物語りが本の形になつて室内に持ち込まれても、それは初めは何人かの人間が一人の読み手を囲んで耳を傾けるものであつた。しかし、その次の段階として、一人で読むことが一般的になつた。(略)

「室の中で一人で読むもの」という所へ来た小説は、当然室の中で一人で書かれるものである。公衆の前で朗誦されながら伝えられて育つた物語りとして、もつとも典型的なものはホオマア^{注17}の作品であろう。それはイメージが公衆の中にいる時の、分散した気の配り方と多数人の感動の集積としての感銘のしかたを予定したものでなければならぬから、その作品の質は室の中で一人で読まれるものとはずいぶん違つたものであるのが当然だ。客観性という言葉で暗示される性質が、そこでは色々な点に強く現われる。あまりデリケートなもの、主観的なものは、暗記されるにも理解されるにも不便であつたろう。(略)

……つまり小説という芸術では演者と鑑賞者が顔を合せないということである。顔を合せない。そして演者即ち作者は密室で一人でそれを作り演じ、読者は密室で一人それを味う。その条件において初めて、他人に言うのをはばかるような内容のもの、罪深いもの、煽情的なもの、告白などがはげ口を見出して書かれるようになり、また読む方も、他人の秘密なひとりごとを聞き、他人の隠したがる行為や考えを知るといふ戦慄を味うようになつた。(略) それは時としては神に訴える罪ある人間の切ない声であり、また時としては、情欲的な好奇心を満足させる打ちあけ話でもある。

そして、そこに近代の小説が成立したと私は考えたいのだ。(「内なる声と仮装」「小説の方法」)

この理論は近代児童文学の成立を考える時にも有効であると思われる。「公衆の前で朗誦されながら伝えられて育った物語り」の特徴——「あまりデリケートなもの、主観的なものは、暗記されるにも理解されるにも不便であつたらう」——は、まさに『子どもと文学』のうちだした、望ましい児童文学作品の特徴と一致する。そして未明否定論者たちが批判の根拠とした「ネガチブなテーマ」「子どものための文学を『児童のために書くのではなく』『作家の忠実な自己表現のために書』^{註30}いている、といった特徴は、伊藤整の理論からすれば、近代小説の成立そのものを指すことになるのである。つまり、戦後うちだされた児童文学観こそ前近代的なものであり、自己の内なる児童観に忠実であり得た未明にこそ、近代児童文学は成立していたということになる。未明は読者と作者のつながりについて次のように述べている。

私は常に思う、童話作家は児童の為に作品を書くのではない。児童に聴かせるのを目的とするという意味ではない。児童は自分達の背後から来る大衆である。最も正直で、純真な感傷性に富んだ大衆、それが児童である。童話作家の童心に立って、正直なる告白と、至純の感傷とによって作られた作品は、^{註31}期せずしてそれらの大衆に受け入れられる筈である。(『童話研究』28・1)

未明のこのことばを、いぬい氏は文字どおり「児童のために書くのではない」と受けとった。だがこのことばは、近代児童文学における読者と作者とのあり得べきつながり方を示唆している。

伊藤整は「(近代小説に於ては―引用者)作者は密室で一人それを作り演じ、読者は密室で一人それを味う」と述べた。そしてこういう事態は、「近世以後の個人の解放」「個我の權威の確立に伴つて生れた」と^{註32}言う。未明は「正直なる告白と、至純の感傷とによって作られた作品は、期せずしてそれらの大衆に受け入れられる筈である」と述べた。「期せずして」ということばにこめられた意味は重い。作品は直接読者の興味をねらって書かれるのではないが、子供はそれを選ぶのである。ここには作者の主体を認めると同時に、一人の個我としての児童の存在を認めようとする姿勢がみられる。子どもは作品を与えられるのではなく、自己の内面の必然に従って選ぶのである。この時、「密室で一人それを作った作者の声と、「密室で一人それを味う」読者の内心の声とは結びつく。こう

いう読者の存在を未明は信じようとしている。個としての作者と個としての読者の存在を重んじた未明の児童文学観こそ、近代の名を被せるにふさわしいものだったと言えよう。

だが、附言すれば、そういう近代児童文学観が成立したからといって、子どもの文学から完全に人語りVの性格が消え失せるものではないということも事実である。大人が作品を選んで子どもに与え、大人がこれを読んで聞かせるといった児童文学にまつわる特殊な条件は、語り手と聞き手とが直接顔を合わせるという物語り成立の条件と似ている。こういう特殊な条件がなくならない限り、児童文学に内在する前近代的な人語りVの性格がなくなることもないだろう。『子どもと文学』にみられた、昔話に学ぶという考え方が生まれる余地も、またそこにあるのである。前近代的文学観と近代的文学観とが並行して存立し得る所に児童文学界の特殊性があり、それがまた原理的な児童文学理論の出現をむつかしくしていると言えるのではあるまいか。

七

さて、未明にとって童話の創造が不可避であった理由は何か。彼のつかんだ世界が、子どもの目に映るそれと重なることができたのはなぜなのか。山田稔氏は言う。

(未明においては―引用者)完全平等のユートピアをねがう性急な憧憬、あるいは純粋な反俗感情は、反都会主義、反資本主義、反物質主義の段階から一挙に、楽園としての原始世界、幼少期、さらには出世以前の状態、生の根源としての自然、そして死の世界、こういった一連のものへと飛躍するのである。ここには帰るべき故郷をもたぬ永遠の郷愁者の、あるいは未来を拒まれたユートピストの、さらにはいうなら政治をもたぬアナキストの、過去あるいは「幼少期」へのいわば「退行現象」がみとめられはしまいか。(「小川未明における思想と美学」『前出』P35)

「ユートピアをねがう性急な憧憬」が一挙に「幼少期」あるいは「生の根源としての自然」にむかうことが、はたして「退行現象」と言えるかどうかという問題は別として、ここには、未明が何ゆえに童話を書かざるを得なかったかという問題がよく語られている。未明にとって子供の世界とは、自分のむこうにひろがる他者の国ではなく、それなくしては己の存在を確認し得ぬ、いわば自分自身の入存在原理Vそのものであったのだ。このように考えた時、始めて児童文学

は、児童にとっても、大人にとっても、また作家にとっても不可欠の近代文学のあるジャンルVとして存在することができるのではあるまいか。

一九七八・八

- 注1 「伝統は克服されたか」(『日本児童文学』1974・1 P 56)
- 2 「これは、他の人間、環境との相関作用がじょうぶんに描かれていないことを意味し……」(古田足日「近代童話の崩壊」『現代児童文学論』くろしお出版 P 57)
- 3 「人魚の娘に性格があるとはいえず、老夫婦の性格を個性的なものとして見ることもできないのである」(『同右』 P 57)
- 4 「赤いろうそくが波の上をただよっていく風景のおそろしさ、悲しさを知ることができても、その恐ろしさに打ち勝つ力を、子どもは発見することができないといえよう」(『同右』 P 57)
- 5 「観念世界の形象である作品の主要素となるものは、人物や事件ではなく、作品全体の気分、調子にある」(『同右』 P 57)
- 6 「……ただ、さびしい、暗い気分だけが、くり返し述べられているだけなので……」(『小川未明』『子どもと文学』福音館 P 6)
- 7 「その世界は(略)呪術の暗いふんい気に満ちている」(「さよなら未明」『現代児童文学論』くろしお出版 1968年 P 16)
- 8 「未明童話のテーマはすべてネガティブなもの……」(「未明童話の評価のために」鳥越信)
- 9 この本は最初、昭和35年に中央公論社から出版された。但し本稿では福音館のものを使用した。
- 10 『子どもと文学』 P 179
- 11 注7に同じ P 6
- 12 「小川未明批判の方向の再検討」(『日本児童文学』1974・1 P 43)
- 13 注10に同じ P 42
- 14 いずれも『子どもと文学』
- 15 注7に同じ P 25
- 16 注5に同じ P 32

- 15 「内にある伝統とのたたかいを」(『児童文学の思想』牧書店 P 17)
- 16 「小川未明」猪熊葉子 P 93
- 17 注7に同じ P 169
- 18 注7に同じ P 178
- 19 注7に同じ P 195
- 20 注7に同じ P 23 傍点いぬい
- 21 本文は『子どもと文学』 P 23から引用した。
- 22 『小説の方法』
- 〔附記〕本稿は「未明童話の評価をめぐって」と題して、『未明童話研究』に掲載した原稿に、大幅に手を加えたものである。『未明童話研究』はゼミナール研究誌。発行 北海道教育大学旭川分校国語科教育ゼミナール 発行年月一九七七年九月 B5版 謄写版印刷 発行部数 40部